## サントリー 食品インター ナショナル

## 「環境目標 2030」達成へ 100%再生可能エネルギーなど



▲サントリー食品インターナショナルの齋藤和弘社長

サントリーグループはサステナビリティへの取組みを加速させる。

CO2 削減については 21 年 4 月に改訂した「環境目標 2030」の達成に向けて 22 年までに日本、米州、欧州の全ての同社生産研究拠点 63 箇所で電力を 100%再生可能エネルギーに切り替えを目指すことを発表した。

また、内部炭素価格制度を21年内から順次導入し30年までに脱炭素を促進する1000億円規模の投資をグループあげて実施する。

プラスチックについてもサステナブル化 100% に向けて、サントリー食品インターナショナルは 全リージョンで取組みを加速させていく。

日本では25年目標50% を22年に3年前倒し して達成することを目標に取り組んでいく。

欧州においても 30 年のサステナブル 100% に向けて 25 年に 50%の目標を掲げている。

日本で12年から業界に先駆けて展開しているボトルtoボトル水平リサイクルも加速させる。

20年は国内のPET使用量のうちボトル to ボトルの使用率を26%に高め、当初25年までと定めていた「50%以上使用」の目標を3年前倒しして22年に達成する見通しとなっている。

21年は、「GREEN DA・KA・RA やさしい麦茶」において、「同 650ml」「同 600ml」では、他ブランドでも順次拡大しているリサイクル素材 100%のペットボトルを全ての商品に使用。また早稲田大学と資源循環型社会形成に向けた取り組み開始し、ペットボトルの水平リサイクルに関する共同研究や学生への啓発活動を実施するなど、ペットボトル(PET)水平リサイクルを積極的に推進している。

事業活動では2030年までにグローバル飲料業界における世界第3極の地位を確立するととも

に、IFRSベースで売上げ2.5兆円を目指していく。 21年12月期第2四半期業績は、コロナワクチン接種が進んだ欧州と米州が牽引役となり大幅な 増収増益となった。

8月決算発表した齋藤和弘社長は「21年度のテーマは『アジャイル・トランスフォーメーション』。変革を迅速に行い、想定を大幅に上回る実績を出すことができた。当社の主要市場で着実にマーケットシェアを拡大し戦略の方向性が正しかったことを改めて確信することができた」と語る。

その手応えの最たるものが各地の定番ブランドとなる。

1-6 月販売数量の前年同期比は、「伊右衛門」 (日本) 11%増、「TEA +」(ベトナム) 17%増、 「VEnergy」(オセアニア) 19%増、「Schweppes」 (フランス) 18%増となり軒並み市場の伸びを大幅に上回った。

エリア別では、欧州と米州が、3月以降ワクチン接種が進み行動制限が緩和されるに伴い大きく 好転した。

一方、アジアについては「今年に入りコロナ変 異株で苦労し、昨年良かったところが相対的に少 し悪く見え、今後、注意深く傾向を見ながらやっ ていかないといけない」と述べる。

世界の製品トレンドとしては、引き続きコロナでストレス解消やリフレッシュといった"右脳需要"に着目する。

消費の都市集中から地方分散への動きについて も継続するとみている。

欧州では、都心のカフェ・バールから地元のカフェ・バールへのシフトが起きており「欧州の業務用は昨年とても苦労したが、身近なところでの活動に目を向けたこともあり、ようやく上向いてきた」と述べる。